

石井方式 漢字の覚え方

はしがき

戦後制定された当用漢字を初めとする一連の国語施策には、現実を無視した行き過ぎがあつて、それが表記の学習をいたずらに煩雜困難なものにして來た。昭和四十三年五月二十七日、第八期国語審議会の最終総会において、当用漢字表の性格について、『厳格な制限的なものではなくて、基準（土台）である』として、表外漢字使用の制限を解き、また、当用漢字音訓表についても、『これを緩和する』という方針を打ち出した。

従来も、大学においては、国語の表記がこのよつた国語施策によって拘束さるべきものではない、との考えの下に、常用漢字表にない漢字が使用され、入試問題にも提出されることがけつして少なくはなかつた。それは、受験生にとっては酷のようでもあつたが、学問的立場からももちろん、社会における表記の現実からしても、常識的に使用されている

表外漢字が事実として存在する以上は、いたし方のないことだったのである。

本書の学習法
国語審議会が、このよきな方針を打ち出したからには、今後の入試に表外漢字がますます多く提出されるようになることは、当然予想される。しかし、従来のような、機械的な暗記にたよるならば、確かに負担を増すことにならうが、『漢字の正しい学び方』さえするならば、学習漢字の増加などほとんど問題にならない。

人間は『思考する』動物である。人間はそれゆえに尊い。ところで、その思考は、ことばによつて行なわれる。しかも、高度の思考は、文字によつて裏打ちされたことば、もしくは文字そのものを必要とする。文字とは、わが国においては漢字である。漢字の学習は、われわれの思考の幅を広げ、内容を深めることを目ざすためのものでなければならぬ。従来、よく見られたような、単なる見かけだけの知識であつてはならない。

本書は、そういう表面をなでるような、漢字の知識を羅列したものではなくて、幅広く

深い思考をするための力を養うべく、科学的、合理的な漢字学習を提唱するものである。若い生徒諸君が、本書により、『漢字で思考する』という新しい学習法によつて、思考力の土台である漢字力を身につけられることを期待するものである。

石井 熟

(1)

本書は、主として基礎編と熟語編とから成つてゐるが、熟語編は基礎編の応用とも言つべきものである。読者は、まず基礎編をよく熟読玩味して、漢字の基本的な意味や性格を、よく突きつめて理解することが必要である。

本書の学習法

基礎編では、□で囲まれた部首を理解することが最も肝要である。そこには、その成り立ち、および本義が説かれているが、部首によってはいくつもの転義のあるものがある。それは、本義に近いものから順に、①②の符号をつけてこれを示してある。ゆえに、学習する場合には、自分でその意味を考え、それを発見するよう努力してほしい。これらはまる暗記するものではなくて、みずから理論づけ、納得することによって論理的に記憶すべきものだからである。

(3) 各部首については、それを部品とするいくつかの漢字が列挙されている。これらの漢字の本義は、部品を総合することにより、みずから発見するよう努めほしい。自分で発見した場合は、それを忘れようとしても一生忘れられない知識となるであろう。漢字の下にある①②の符号は、それぞれ部首の①②の意味に用いられていることを示しているが、まず独力でその意味を探るようにしてほしい。

い。

(4) 間にはすぐ正答が得られるはずである。得られなかつたり、誤るような場合は、基礎学習の未熟であることを表わすものであるから、その項の初めからあらためて学習しなおすようにしてほしい。

(5) 熟語編を学習している場合にも、ときどき基礎編に立ち帰つて、一字一字の本義はもとより、部首などを復習してほしい。

(6) ある漢字について、あいまいだつたり、自信が持てない場合は、すぐ調べてみることが肝要である。調べることによって力が著しくつくものである。

▼略号一覧

× = 常用漢字表にない漢字であることを示す。

○ = 当用漢字補正案で新たに加える字であることを示す。

△=その音訓が常用漢字音訓表に認められていない漢字であることを示す。
▲=その漢字が部首の①②…以外の意味に用いられていることを示す。